

<今週のお宝盤>

受付期限：2026年3月4日

第9091番 ジョコンダ・デ・ヴィートの『クロイツェル』



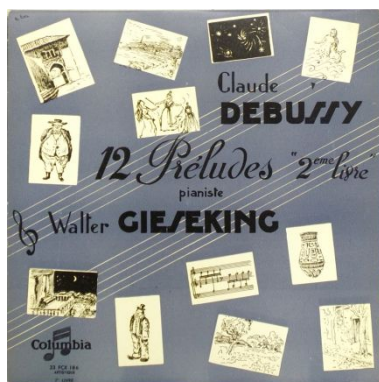
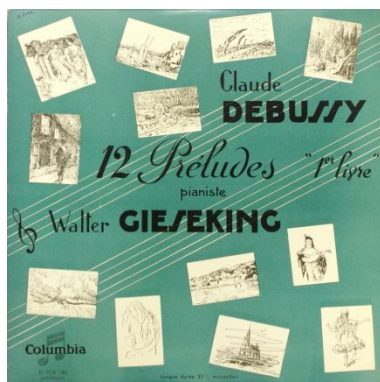
税込165000円

英EMI / ALP 1319 / 1955年録音 / オリジナル / モノラル / G

ベートーヴェン 『クロイツェル・ソナタ』 ジョコンダ・デ・ヴィート (vn) / アブレア (p)

余談だがデ・ヴィートは往年の名女優原節子に似ているので日本人には親近感がある。イタリア半島は長靴の踵の小さな町で生まれ育ち、最初は東海岸の中部まで北上してロッシーニの生地ペーザロの音楽院に学んだ。ウィーンのコンクールでの優勝にもかかわらず、事情は分からぬがデビューは遅く、又引退も早かったので、数少ないすべての録音の入手が難しい。そのコンクールではヤン・クーベリック、クーセヴィツキー、クレメンス・クラウスが審査員だったと言うから本物だ。この演奏は変化に富んでいる、音色は時に夢見る乙女、特に暴君にも変身し、ローマ・サンタ・チェチーリア音楽院教授であるティト・アブレアの音楽の浮沈に見事についてくる演奏が加わって、デ・ヴィートは最大限の表現に達している。二人は明らかに充実期のベートーヴェンを意識している。聞きようによっては、彼らは命がけの演奏をしている。これが真の芸術家でなくて何だろう。二人の血管は膨れ上がり、眼も耳も頭脳から放たれる指令に食いつくように離れず、ひたすら指先の動きに心を込める。速いパッセージにおいても姿勢は全く変わらない。このレコードは入手難のみならず演奏そのものがレアである。(山田)

第9092番 ギーゼキングのドビュッシー・前奏曲集



税込33000円

仏パテ / FCX 185-6 / バラ2枚組 / 初期ジャケ / 1953-4年録音 / モノラル / G

ドビュッシー 前奏曲第1巻、第2巻 ギーゼキング (p)

リヨンで生まれたドイツ人ギーゼキングの弾くドビュッシーは今でも教則用に重宝されている。私の店に音大生が来てドビュッシーを選ぶのに、ギーゼキングを指定してくることは時折ある。彼のドビュッシーは今なお第一線で生きているのである。最大の理由は曖昧を許さないことである。ドビュッシー自身ピアノの名手であり、若い頃はチャイコフスキーの支援者して著名なメック夫人宅で子弟のピアノ教育に当たったことがある。これは壮年期の代表作だが、個性的な小品に溢れており、バルトークのミクロコスモスにも比べられる。作品を機能的に演奏することもあり、即物主義と呼ばれることもあるギーゼキングだが、付されたタイトルに忠実であることも確かだ。この作品ではそうした色とりどりの表現がとても大切だ。温かさがあったり冷たさがあったり、忙しかったりゆっくりしていたり、笑ったり怒ったり。この演奏は各国で今日まで命脈を保っている。それほど長きにわたって信頼の置かれている演奏は少ない。当時としては出色の録音であり、これを凌ぐ演奏が現れなかったことによるのだろう。彼の演奏の素晴らしさはどんなに速いパッセージでも粒が揃っていること、そして特筆すべきは弱音がひととき美しいことだ。ある作品で永遠の輝きを見せる録音は中々存在しない。(山田)